

群青の海

九条 之子

第一章 夕陽

(一)

「お座敷が掛ったら、どこへでも出て行って、歌いましょう！」

と言ったのは、息子の小学校のママさんコーラス「ハニーコーラス」の指揮者だ。その少し前に、元アイドルの歌手が渋谷の駅前でゲリラライブをやって、警察に止められ、新聞をにぎわせた。

「私達も、ゲリラライブをやろう！」

とコーラスのメンバーを笑わせた美紀の大親友は、翌年PTA会長に就任した。

そんな思い出とどう結びつくのかはわからないけれど、「講演」の依頼が来たら、即座に引き受け、更に、講演の終わりには、一人芝居か、歌を披露することになっている。

旅の大好きな美紀が、お小遣稼ぎに書いて応募した旅のエッセイ「思い出紀行」が大賞を受賞し、本になった。今の世の中は不思議である。たった一冊本が出ただけでも、講演の依頼が来る。セミナーの講師の依頼も貰った。「お座敷」が掛ったら、余程の悪条件でない限り受けることにしている。指名してくれた人の気持ちは、素直に嬉しい。人生は一度きりだ。せっかくの機会を逃したら、もう二度と、同じ機会を巡ってこないかも知れない。

美紀も、来年はファイフティになってしまふ。折り返し点は、もう過ぎてしまっている。

「小暮君から、皆さんの卒業記念の講演をしてほしいと頼まれてまして……」

と言っただけで、ファイフティンの、二百人を超える中学生達は、一斉にどっと笑った。小暮先生は、白髪で、おなかも出た、怖い先生であるらしい。けれども美紀にとっては、同級生の「小暮君」以外のなものでもない。

それにしても母校は変わってしまった。美紀が中学生だった頃よりも生徒数も増え、校舎や体育館も建て替えられ、むしろ発展している。ただ、どこにも名残りがいないのが、少し寂しい。

しかし、美紀はやっと見つけた。グラウンドに沿った道の反対側にある小さな商

店だ。

「ああ、まだ、ある……」

美紀は声に出して言った。陸上部員だった美紀達が、夏休みや春休みの練習の後に毎日のように立ち寄って、食べたり飲んだりした店である。

あの時の……、真っ赤な夕陽が蘇る。

(一)

陸上部顧問田代先生は、ここ第三中学校へ、二年前にやって来た。美紀が一年生の時だ。彼は長身だが、とても小さい車に乗っている。

「あ、来た、来た！」

青い車のでっぺんが、グラウンドに沿った塀越しに、かすかに見える。塀の上に少しだけ頭を出し、余り速くもなく、校門へと向って行く。グラウンドに入って来たとたんに、

「もつと、速く、走れ！」

と叫ぶくせに、安全運転をモットーとしているのか、彼の車のでっぺんの青は、ゆっくり、ゆっくりと滑って行く。練習は、勿論、厳しい。口も荒い。

一年生の時、美紀は、なんと、田代先生にスカウトされたのだ。入学したばかりの四月に行われる「校内陸上競技大会」二百メートルで美紀は優勝した。それまで、陸上競技なんかとは無縁だった美紀は、予選と決勝がある大会というものも初めてだった。おまけに二百メートル走ったのも初めてだ。そして、最後に、陸上部顧問の先生にスカウトされるなんて、初めてが二つも三つも続いたようなものだ。美紀の家は当時、祖父母も、更に曾祖母もいる大家族で、毎日の団欒では、皆、その日一日の出来事を包み隠さずに話した。

「体操部になんかいるよりも、陸上部の方がずっといいよ」

その頃は、母よりも、むしろ祖母の方が発言権は強かったのだ。

「そりゃあ、おばあちゃん、陸上は、なんて言っても、オリンピックの華だもの」
若い頃はスポーツウーマンだったという母も、なんだか嬉しそうだ。たかが中学校の陸上部にスカウトされただけで、オリンピックにまで話が広がる所がなんとも凄い。

「お姉ちゃんが、体操なんかやってても、見込みないもんな」

弟にそこまで言われるのは悔しいが、確かにそうだと美紀も思う。

体操部の仲間申しわけない気持ちにはあったが、何より、スカウトされた嬉しさから、陸上部に入ることを案外すんなりと決定した。初めて陸上部員としてグラウンドに立った日は、ゴールデンウィーク明けの五月晴れの空が広がっていた。

(三)

入るまではチャホヤしてくれたのに、いざ、入ってみたら、手の裏をかえすように冷たい。よくある話だ。第三中学校陸上部も、顧問の田代先生も、まさに、そんな感じだった。

しかも、自分は実は「ダシ」だったのだ、ということに美紀はすぐに気付いてしまったのだった。彼女の名は、安藤由加里という。その日、入部するはずだったのは、美紀一人ではなかった。安藤由加里と、もう一人、篠田順子という、一年生だった。

「藤沢美紀!」「はい!」

「篠田順子!」「はい!」

「安藤由香里!」「安藤由香里!」

「安藤さんは、欠席です」

と答えたのは、陸上部女子部長の清水道子だった。

初日から欠席の、安藤由香里、その人を、田代先生はスカウトしたかったのだった。

「一人じゃ入部しにくいだろうって、私達を誘ったってわけ」

順子が冷めた口調で言った。なるほど、と美紀もようやく納得した。そう言えば、小学校六年生の運動会で、風のように校庭を駆け抜けた少女がいた。

「安藤さんは、欠席の連絡ありません」女子部長が、再び田代先生に報告する。

「アップ開始だ!」

美紀と順子を特別に紹介することもなく、練習は開始された。

男女混合リレー。陸上部を一年生から三年生まで縦に二つに割ってリレーで競う。それが、練習の最後のメニューだった。練習とは言え、リレー、しかも、陸上部全員参加、ともなれば、異常なほどに皆、勝を狙った。

「ゴン!気を抜くな!」

田代先生が「ゴン」と呼ぶのは、第三中学校の番長である、関口守のことである。美紀と同じ一年生であるのに、早くも番長の地位を奪ってしまった怪物である。

ゴンちゃんの種目は、砲丸投げだ。それでも、田代先生はゴンちゃんを走らせる。

ゴンちゃんは、リレーとなると、まるで弾丸のように、それでいて、この上なく無様に走った。美紀は、いつも、ゴンちゃんの無様な姿に目を奪われた。

(四)

「恋」というものを、美紀が初めて知ったのは、小学校一年生の時だ。

小学校一年生の恋だなんて、本物じゃないよ、と人は笑うかも知れない。でも、美樹にとっては、生まれて初めて、人を好きになることを覚えた「大事件」だったのだ。

岡田健吾。それが、美紀の王子様の名前だ。王子様は、一年一組、出席番号一番。本当に、王子様のその席だけにスポットライトが当たったかのように、キラキラと輝いていた。

王子様は何をやっても一番だった。まず、絵だろうか。たとえば人の輪を描くとする。みんなの絵では、後ろ向きの人は絵の天井に足を向けている。しかし王子様の絵では、後ろ向きの人は見る人に背中を向けていた。横向きの人は、それぞれ横顔を見せていた。担任の横田先生は憚ることなく、岡田君の絵は素晴らしい、と言った。

しかし、王子様はそんなことを気にする風もなく、泰然と窓際の一番の席に座っていた。王子様は、今、陸上部と同じグラウンド内にある、野球部のグラウンドの、ピッチャーマウンドに、すっくと立っている。彼の姿は、今も、凛々しい。

そして、なんと、美紀もゴンちゃんも、王子様も、同じ地区に住んでいるのであった。第三中学校の中でも、一番海岸に近く、しかも、伊豆から流れてくる狩野川が、駿河湾にそそぐ、河口に隣接した地区は、「我入道」と呼ばれていた。

「我、道に入る、っていう意味だそうだよ」
と美紀に教えてくれたのは、祖母だ。三人の中で一番我入道海岸の近くに家があるのは、ゴンちゃんだ。ゴンちゃんは、それこそ、夏の間は、ずっと海に浸かって、大きくなったようなものだ。我入道の少年たちは、海に行くなどとは思わない。海に浸かりに行くのだ。

「ピッチャーの岡田君で、美紀と同じ、我入道なんでしょう。ゴンちゃんとは、大違いね」

と、しっかりライバルとなった順子。そうかなと、美紀は順子の前では、とぼけておく。

順子とは、波長が合うのだ。だからこそ、順子には、王子様のことを知られたくない。

(五)

黄金色に輝く富士山を、一体どれだけの人が、見たことがあるだろうか。夕陽に染まって、富士山は、キラキラと黄金色に輝くのだ。どんな景色よりも美しいと、美紀は思う。黄金色の富士山は、その色ゆえに、美紀にとっては秋のイメージだ。

夏の富士山なら、我入道の海岸から眺める富士山だ。左に駿河湾、右手後方に富士山、それらが同時に見られる土地が、どれ程あるだろうか。

「走る時は、いつだって日本一になるつもりで走れ！」田代先生の口癖だ。

「秋の中体連のメンバーを発表する！」

梅雨の終わり、金曜日の放課後とあって、急遽、グラウンドでの練習はお休みとなってミーティングが開かれた。窓の外は、本降りの雨である。美紀の専門は、二百メートルである。スプリンターのみが、百メートルを専門とする。

「百メートルは、清水と、安藤！」と、田代先生。

「安藤って、安藤由加里さんのことですか？」

女子部長の清水道子が立ち上がった。

「そうだ、安藤由加里だ」

「でも、安藤さんは、練習にまだ三回しか、出て来ていません！」

「一番速かっただろ。三回とも」

田代先生は、何のことはないという風に、メンバー表が書かれたノートを閉じた。

(六)

「ああ、ほんとに、残念！」

ハードル専門の柴田節子は、美紀と順子と一緒に、陸上部中一トリオと呼ばれている。

ああ、と順子が悲鳴に近い声を上げたのは、野球部の敗戦を嘆いたためではない。

駆け込みで入った「かき氷屋」のかき氷が、頭にツンと来たからだ。

「まだ、一年生だもの。負けたって、いいよ」

「えっ？」

順子も節子も、美紀の一人言を聞き逃さなかった。夏の中体連は、陸上部を除いて、七月中に行われる。自分の部以外に、一か所は応援に行こうと、生徒会から言わ

れている。

「応援に行くなら、やっぱ、野球でしょ」と順子が言った時、美紀は、内心ホッとした。

「なんだ、お前ら、サッカー部の応援には来ないくせに、野球部の応援かよ」

その時、かき氷屋にドカドカと入って来たのは、サッカー部の五人組だ。

「だって、サッカーって、ちっとも、点が入らないんだもの」

節子は、サッカー部に批判的だ。サッカーのボールが、よくハードルを倒すからだ。

「今日の野球部は、一対〇で負けたんじゃないか」

サッカー部の一年生を引っ張っている杉本も、美紀と同じ「我入道」地区の生徒だ。

「野球は、入る時は入るじゃない」順子が言うと、サッカー部ナンバー二の佐々木が、

「確かに、それは言える」と、順子に味方した。

「佐々木は、順ちゃんのファンだからな」一番小柄の武井がチャチャを入れる。

「美紀ちゃんは、野球とサッカーとどっちが好き？」

杉本が、かき氷を食べる手を止めて、美紀の顔を覗き込む。

「野球、かな……」「えっ！」

かき氷がツンと来たのか、可哀そうなくらいに、杉本が顔を歪めた。

(七)

中学生になって初めての夏休み。夏を制する者が秋に勝つ、と田代先生は、一学期の最後のミーティングで言った。ただ、陸上部を除いては、ほとんどの部で中体連が終わってしまったので、運動場は寂しい限りだ。

「あ、来た、来た！」青い車のでっぺんが、グラウンドに沿った塀越しに、かすかに見える。田代先生の車だ。午後二時から夕方までの三時間、厳しい練習が始まる。

サッカー部の杉本と佐々木が混じっているのは、秋の中体連陸上競技大会に出場させるために、田代先生が特別に指名したからだ。ひたすらボールを追いかけて、グラウンドを走り続けている彼らは、並みの陸上部員よりも持久力があるばかりか、むしろ速い。

「杉本君達、このまま、陸上部に入っちゃえば？」

「それはないよ。ただ走ってるだけは嫌なんだ」

「ただボールを追っかけてるのも、そんなに面白そうじゃないけど……」

「そんなことないさ」

「そうかなあ。中体連で、杉本君が入賞とかしたら、きっと陸上が好きになると思うよ」

美紀は、本当にそう思った。が、杉本は頷かなかった。

夏休みの練習も、一日の最後は、リレーで締めくくる。

美紀は、この「紅白対抗リレー」が、日に日に好きになった。リレーになると、人は我を忘れて走る。自分一人で走っている時とは違うパワーが出るのかもしれない。美紀の次の走者は、杉本だった。リレーゾーンで待つ杉本が、美紀に大きく手を振った。

その時、美紀は不思議な力に引っ張られるかのように、前を走る順子に迫った。並ぶ。隣で、順子があっと、小さな声を上げた。そして、順子を抜き去る。

大きく差しだしたバトンを、サッと受け取って、杉本は風のように走り出した。その日、美紀達の紅組は、白組を大きく引き離して、勝利した。

八月が終わる。狙いすましたように、大型の台風がやって来た。

美紀の幼い頃の記憶に、大型の台風の記憶がある。伊豆の奥から流れて来る「狩野川」の河口にある「我入道」には、河から溢れた水が道路に押し寄せて来ることもある。

「台風が来るっていうのに、クラブなんかへ行くつもり？」と母。

「こういう時にこそ、行くんじゃない。リレーメンバーに選ばれたいもの」

「無理だよ。美紀ちゃんには。陸上は素質だもの」

こんな残酷なことを言う母親が、どこにいるだろうか。雨は天気予報通りに、正午をすぎると一段と激しくなった。グラウンドでの練習は、確かに出来ない。夏休みの最後の練習日でもあったその日、美紀は練習に行かなかった。雨と風とが、窓を叩いている。

二日前の夕暮れが思い出された。真っ赤に燃えた、西の空だった。

第二章 海風

(一)

九月、新学期。久々に顔を合わせるクラスメート。始業式がおわるとすぐに、美紀は陸上部の部室に向かった。ロッカーを開けると、白い封筒が目飛び込んできた。

「何だろう？」美紀が白い封筒を振って見せると、順子と節子が集まって来た。

「開けてみたら？」と、順子。白い封筒の中身もまた、白い便せんだ。

「藤沢美紀様 僕は、君が好きです。ずっと、見ています」

ただ、それだけが黒のボールペンで書いてあった。

「これだけ？」と節子。

「これじゃ、何にもわからないじゃない」

順子は、白い便せんを美紀から取り上げ、窓から入る陽に照らしてみている。

「焙り出しでもなさそうだね」順子の顔は真面目だったが、

「なんだか、間抜けなラブレターよね」

と言った節子の言葉を合図に、三人でケラケラと声を出して笑った。それから一週間後、中体連陸上競技大会の出場メンバー最終発表が行われた。二百メートルの選手として、美紀は順子と共に選ばれた。いよいよ、四百メートルリレーのメンバー発表である。 どうか入れますようにと、美紀は心の中で祈った。田代先生が、一段と声を張り上げる。

「次に女子四百メートルリレー。清水道子、増田奈緒、安藤由加里。それから篠田順子。

補欠、：藤沢美紀」

補欠。美紀には、その言葉を理解するのに、少しばかりの時間がかかった。

(二)

美紀は、二百メートル予選を、二位で通過した。そして迎えた、二百メートル準決勝。いよいよ美紀の組である。美紀はジャージを、サポートについでくれた杉本に渡した。

頑張れよと、杉本が短く言った。小さく頷いて、美紀はスタートラインに並んだ。

名前がコールされる。この瞬間が、美紀が一番好きである。芝居には、カーテンコールがある。映画にはエンドロール。陸上競技では、最初のコールしかない。

「よーい！」ピストルの音が、青空に駆け登っていく。スタート直後、美紀には何故か、ためらいがあった。全力で行っては、最後の五十メートルが頑張れない。

その一瞬の迷いが、美紀の走りをわずかに鈍くしたらしい。さあ、後半だ、と気付いた時には、もう遅かった。前半の遅れを取り戻す力がわき出ることがなかった。

美紀は四位だった。四位では決勝に残れない。

個人種目が終わってしまった美紀は、順子のサポートに付いた。

「悪いね……」と、順子が小さく言う。

「ううん……」と返すしかない美紀だ。サポートありがとうという意味か、走ることを奪ってしまつて悪いねという意味かどっちだろう。いや、どっちも込めているのだろう。

頑張つて、と順子を送り出す。女子の最終種目、四百メートルリレーの号砲が鳴った。

一走は、三年生の増田奈緒。三番手で、二走の順子に向つて、突進してくる。

順子はリレーゾーンいっぱい引張つて、なんとかバトンを貰つた。

順子も、よく流れに乗っている。さあ、安藤由加里だ。

順子よりも由加里の方がスピードがあるので、バトンはそれほど引張らない。

すぐに受け取つて、すぐにスピードを上げた。二番に上つたところでアンカーの清水道子にバトンが渡される。清水のスタートが早かつたせいかバトンがなかなか渡らない。

次の瞬間、バトンはやっと清水の手の中に納まり、清水はフルスピードで走り出した。そのまま、二着でゴール。やったあと、三中のベンチ内に歓喜が溢れた。

良かったね、と口ぐちに言いながら、リレーメンバー達が戻ってくる。

リレーメンバーがテントに戻つて来た直後だった。グラウンドに放送が流れた。

「女子四百メートルリレー決勝、第三中学校は第四走者のオーバーゾーンのため失格！」

その結果、第三中学校は、総合三位を逃し、四位に転落した。

(三)

中学生最後の春、美紀に大きなプレゼントが与えられた。美紀は王子様と一緒にクラスになったのだ。三年A組、担任はなんと田代先生。A組には、なぜかゴンちゃんまでいた。

四月の半ばになって、三年A組にはおかしな噂が流れていた。ゴンちゃんが、美紀の王子様、岡田健吾のお弁当を取り上げて、彼に自分のを与えているのだという噂である。

「ゴンちゃんて、ひどい！」

女子達は陰で言い合った。三年生になって三中は、「浜の番長ゴンちゃん」の天下になっていたのだ。でも美紀は、王子様をいじめるゴンちゃんを許してはおけない。

「ゴンちゃん、毎日、お弁当を取り上げるなんて、ひどいじゃないの！」
美紀は、陸上部の練習開始前に、ゴンちゃんに詰め寄った。

「取り上げる？俺が？それ、反対だよ」

「ええっ？反対？」

「俺が頼まれてんだぜ、毎日。岡田に」

「何それ。そんな訳ないじゃない！」

「俺だって最初は思ったよ。あいつの弁当が、毎日インスタントのハンバーグだなんてさ」

「えっ？インスタントのハンバーグ？」

「袋のまんま、温つためるやつだって、岡田が言ってた」

「い、忙しいのかな、お母さん、病院の仕事……」

「そうなんだろ、きっと。君のお母さんの作ってくれるお弁当は、とつても綺麗だねって、俺の弁当を岡田が覗くから、食ってみるかって、俺が言ったんだ」

「ええっ！そうなんだあ」

「岡田の弁当は、確かに毎日、おなじみハンバーグなだけ……。俺は毎日、お母ちゃんのうまい料理を食ってるからなあ、弁当くらい、うまくなってもいいんだよ」

お弁当事件によって、王子様は、ますます陰が濃くなり、番長ゴンちゃんは、優等生岡田健吾も味方にして、ますます傲慢に輝きを増していった。

(四)

王子様の家は、内科の病院だった。王子様の上に兄がいて、三年連続で医学部を落ちたという噂が流れていた。王子様が医学部に行つて、病院を継げばいいんだ、と美紀は思う。

「奥さんが、地味な人でね」

と言うのは、美紀の祖母だ。祖母は腰痛やら何やらで、毎日岡田医院に通っている。「先生は優しい」と、祖母が言う「先生」とは、健吾の父のことだ。先生のおかげで、祖母は病院通いが楽しくて仕方がないらしい。

「弟の方が頭がいいんだってね」どこから聞いて来たのか、祖母はそんなことまで言う。

「同じクラスになったの、今年」

「へえ、そりゃあ、良かったねえ。もしかして、美紀ちゃんのボーイフレンド？」
「そんなんじゃないよ、別に……」

赤くなっているはいないだろうか、美紀は少し心配になる。

「お兄ちゃんの方は、医学部に入れなくて、おかしくなっちゃったって、看護婦さん達が言ってた。予備校にも行かなくなっちゃって、うちにばかりいるらしいよ」
老人達の話の種にされる、健吾の兄、壮介も辛いに違いない。健吾のお弁当に毎日ハンバーグばかり入れる母親は、家から出ない壮介に一体何を毎日食べさせているのだろうか。

(五)

それは、金曜日の最後の授業の時だった。田代先生が、社会の授業をやっていた。
「こら、ゴン！寝るな！今週もこれで終わりだ。最後の授業くらい、ちゃんとやれ」
授業の最初から、田代先生は、大きな声を張り上げていた。三、四時間が体育、しかも水泳の授業だったので、居眠りしていたのは、ゴンちゃんばかりではなかった。
「起きろ！」田代先生が、もう一度言った時だった。廊下をバタバタと誰かが駆けてくる音がした。続けて、ドアをトントンとたたく音。事務員がドアの外から、田代先生を呼んだ。ドアの外へ出て行った田代先生は、何故か、

「岡田！」

と、王子様を呼んだ。王子様は、フラツと立ち上がり、田代先生の後を追って、ドアの外に消えた。田代先生が、教室に首だけ突っ込んで、自習だと、叫んだ。

「オウ！」跳ね起きたのは、ゴンちゃんだった。それから、六時間目終了のチャイムが鳴るまで、いや、鳴っても、田代先生と王子様は教室に帰っては来なかった。

その訳を美紀が知ったのは、その日の六時のテレビのニュースだった。その日の昼過ぎ、健吾の母、岡田律子が、自宅のリビングで、何者かによって殺されたのだった。「リビングが荒らされていないところから、顔見知りによる犯行かと思われますと、」ジャストニュース」のアナウンサーは伝えた。

「先生、浮気でもしてたのかしら」

母が祖母の方を見て言う。藤沢家の夕食の団欒である。

「浮気してたんなら、殺されるのは、先生の方だろ」と、祖母。

「おばあちゃん、鋭い！」ませた口を利くのは、美紀の弟の雄太だ。

健吾はどうしているだろうと、美樹が思った時だった。画面のアナウンサーの手に、

白い紙片が渡された。アナウンサーの表情が、気持ち引き締まったように感じたのは、美紀だけであろうか。次の瞬間、アナウンサーの口は、少し上ずったように動いた。

「只今入った情報によりますと、岡田医院の主婦、岡田律子さん殺害は、長男によるもの
と思われます」

「あ、あの、お兄ちゃんが……」

お兄さんのお昼ごはんも、やっぱりハンバーグだったんだらうか。美紀は、テレビ画面を見つめながら、そればかりが気に掛った。

(六)

王子様が、事件後初めて学校に出て来た。母親殺害事件から、三日がたっていた。
「俺の弁当、食えよ」

と、ゴンちゃん。美紀は、ゴンちゃんをつついた。王子様がいつもとちつとも
変わらないのが、せめてもの救いだ。田代先生も、その後、一度も「岡田医院の事
件」に触れることはなく、クラスメートの口の端に上ることも次第に少なくなっ
ていった。

一学期の期末試験が近づいていた。王子様は、昼ごはんは、学校の購買部のパン
ばかりだった。岡田の家は、先生と健吾の二人きりでどうしているのだろうか。

「先生が看護婦といい仲だったってのは、本当だったんだねえ」

祖母は、「岡田医院の事件」以来、心なし暗い。

「その看護婦さんが、奥さんの代わりにおうちに入ってたって訳じゃないんでしょ」

「先生は、決して、そんなことはしないよ」

「岡田君は、何があっても、動じる人じゃない……」

祖母と美紀は、それぞれ、同じことを考えている。

私に何ができるのだろうか。小学校一年生の入学式の日から、中学三年生になった
今日まで、ずっと思い続けて来た王子様、岡田健吾のピンチ。そんな時に、一体、
私は何をすればいいのか。美紀は、ずっと考え続けている。でも、何もできない。
健吾は、学校に出て来た日から、野球部の練習にも毎日出ていた。それだけが、せ
めてもの救いだ。

美紀達学年の最後の中体連に向かって、各部とも、練習に熱が入っていた。

杉本達のサッカー部も、部員も随分と増え、校庭における勢力も、一段とパワーアップしたようだ。何よりも、「サッカー熱」のようなものが、ジワリと世の中に湧き上がってきていた。杉本達は、時代を先取りしていたとも言える。

「あのラブレター、誰だったんだろう……」アップを終えたところで、順子が言う。「あれつきり、何にもないんでしょ」と、節子。

「変なやつなんだよ、きつと。からかわれたみたい……」ラブレター以後、なにもなくて良かったと、美紀は思っている。

サッカー部は、今日は、紅白に分かれて練習試合をやっているようだ。

（サッカーをやっている時だけは、ちよっぴり、かっこいいかな……。杉本も）ボールを追いかける目は、誰よりも真剣だ。

（七）
今年、空梅雨だったが、それを挽回するかのよう、昨日から雨が降り続けている。
日曜日の夜。雨が屋根を叩いている。どこかで、誰かがずぶ濡れになっている……。

月曜日の朝。三年A組の教室には、男子生徒がほとんどいなかった。教室にいたのは、がり勉の沢野と、肥満体の勝俣の二人だけだった。

「集団寝坊？」「っていうのも、難しいだろうし……」

「集団……逃亡」

「ねえ、聞いてえ！」

と、その時教室に走りこんで来たのは、クラス委員の長谷川志野だった。

「あの子達、沼津港から、みんな密航しようとしたんですって！」

「密航！」みんなで声は張り上げたものの、密航という言葉が、どうもピンと来ない。

「密航って、あの子達、一体……」

「外国へ行く船に、乗り込んで、隠れてたらしいわ」

「馬鹿じゃないの！」

女の子達全員で、バカ、バカと言いつつ。

「ゴンちゃんたら、みんなを巻き込むことないじゃないの！」

美紀は、ゴンちゃんが許せない。

「首謀者は、岡田君らしいわ」と、再び、志野。

「岡田君が、首謀者？」

それきり、女の子たちは固まってしまった。美紀には、首謀者が健吾だなどとは信じられない。が、次第に、首謀者は健吾しかいない、と思えて来た。

（そうだ、健吾は、どこかへ、行ってしまいたかったのかも……）

（八）

日曜日の夜に、密航をたくらんだ岡田達三年A組の男子十四名は、警察に捕まり、月曜日の新聞の地方欄に小さく載った。田代先生は退職を申し出たということだが、その申し出は却下され、先生は授業に戻って来た。十四人が学校に出て来たのは、火曜日の朝だ。

「お魚を釣る船にもぐり込んで、外国に行っちゃおうとしたらしいわよ」

「バツカみたい！」

陰でみんなに馬鹿にされているのはわかっていながら、十四人は平気な顔をしていた。

クラス内では、むしろ半分英雄のようにも振舞えた健吾達だったが、クラスの外では、そうはいかなかった。健吾は野球部でレギュラーをはずされたようだ。

ゴンちゃんには、男子運動部室の掃除一ヶ月が課された。

「俺も出場停止がいい」と、ゴンちゃんは言った。

「ゴンは、放っておくと、また悪さをするだろう」

退職を思いとどまった田代先生にも、やっと元気が戻って来た。

「ゴンちゃん、優勝するんだよ。今年こそ、砲丸投げで。それが田代先生へのお詫びだよ」

陸上部副部長になった、節子は、やっぱり、いいことを言う。

優勝、その二文字のためにすべてを賭けようと美紀自身思った。高校生になっても、陸上競技を続けるか、それはまだわからない。その答えは優勝の後に出そうと決意していた。

第三章 群青

（一）

三度目の夏が来た。絶対に、優勝する。これが、春からの、陸上部のスローガンだ。夏の中体連で第三中学校の成績は今一つ伸び悩み、優勝出来たのはバレー部の女

子だけだ。おかげで、秋に中体連が行われる「陸上競技大会」に、全校の期待が集まっている。

一夏を賭けよう、と美紀は自分に誓った。美紀は、そして、順子もおまけにもスプリンターとは言えないから、二百メートルを専門としている。四百メートルリレーのメンバーに、ついになれたのは、練習の賜物である。

「バトンだけは、どこにも負けないように、練習しよう！」

それが、美紀達チームの合言葉にもなっている。

「我入道」の海岸の片隅には、土俵があった。九月の初めに「少年相撲大会」がある。ゴンちゃんは、中学一年、二年と、三年生を抑えて優勝している。つまり、横綱である。

「今年は、やめろよ！怪我でもしたら大変だ」

田代先生に言われた時、ゴンちゃんは、びっくりしたような顔をした。

相撲というスポーツが、今よりも遙かに人気があった頃のことだ。少年相撲大会の横綱は、「番長ゴンちゃん」にとっては、なくてはならないタイトルだったのだ。

個人種目の二百メートルで、三番以内に入る。それから、四百メートルリレーで、優勝する。それが美紀の目標だ。心が決まったせいか、今年は、夏の暑さも気にならなかった。

夏休みにもかかわらず、田代先生は、相変わらず、小さくて青い車に乗ってやって来る。そして、みんなのアップが終わった頃を見計らって、グラウンドに現れる。

「ゴンは？」

田代先生は、円陣を組んだ陸上部員を見回して言った。田代先生は、円陣を組むのが好きである。試合の前日も、試合当日も円陣を組ませる。競技会の始まる前には、皆でグラウンド一杯に大きな円を作る。そして、どのチームよりも大きな声を出して体操をする。

「陸上競技は、決して、個人競技じゃないぞ！チームみんなで勝つんだ！」

と、田代先生はいつも口に出している。が、今日の円陣に、ゴンちゃんの姿はなかった。

「 gon は、どうした？」「すもう……」円陣の中から、小さな声が聞こえた。

「すもう……？すもう、だと？」

「もうじき、お祭りだから……。今日は、総練習があるって言ってました」
その声がまだ終わらないうちに、

「ゴン連れて来い！」という田代先生の雷が落ちた。

陸上部員が我入道海岸の土俵に駆けつけた時、「秋の相撲大会 総練習」の、まさに決勝戦が始まるうとしていた。ゴンちゃんと対戦するのは、西伊豆中の番長だった。

「関口！」と、ゴンちゃんの本名で、陸上部員が呼んだ時、ゴンちゃんはなんとも妙な顔をしたという。次の瞬間、ゴンちゃんは、土俵の下へ投げ飛ばされた。

そして、ゴンちゃんは、しばらくの間起き上がることが出来なかった。

結局、ゴンちゃんは足を骨折し、相撲大会に出ることが出来なかった。

(二)

美紀は、スタートラインに立っている。二コースである。

この瞬間が、一番怖い。でも、一番好きな瞬間でもある。

真夏の容赦ない太陽、秋の爽やかな風、木枯らしが吹きぬけるグラウンド、春の嵐……。

美紀の頭の中を一瞬にして、色々なものが駆け巡る。私は、走ることが好きだ、と思った瞬間、号砲が鳴った。一斉に、綺麗なスタートが切られた。自分が風になる。ゴールが見える。あと五十メートル！

私は、負けない。自分に負けない。美紀は、ゴールを駆け抜けた。三番だった。

四百メートルリレーも、なんと三位に入った。県大会に進む権利を獲得したのだ。さあ、あとは、団体の優勝になるかどうかである。

すべての競技が終わった時点で、ポイントが計算される。そして閉会式が始まった。「それでは、最後に、団体の表彰に移ります！」

会場内がざわめく。発表は、六位から始まった。

「団体三位……、第五中学校！」わーっという声とえーっという声が入り混じる。

「五中が三位？」そんな声がどこからか、聞こえる。

「第二位！団体二位は……、第三中学校！」

えっ、と美紀は思った。順子と顔を見合わせる。

どうして二位なの。それは声にはならなかった。場内のざわめきがうねりのようになる。

「団体優勝は……、初優勝……、西伊豆中学校！」
うわっ、という歓声が、列の端に陣取った中学校から起きた。

「西伊豆中学校は、二位の第三中学校に、わずか一ポイントの差で勝ちました！」
司会者の言葉に、再び悲鳴のような歓声が沸き上がった。

一ポイント。一ポイントでも、負けは負けである。

「汚ねえ……」美紀の後ろで、唸るような声が聞こえた。

「西伊豆のやつら、計画的だったんだ！」

西伊豆の番長に投げ飛ばされて、相撲大会も、陸上競技大会も出場することが出来なかったゴンちゃんのうちめき声だった。

(三)

「決闘、だって！」節子が、部室に駆けこんで来た。

「ケツトウ？」

「決闘って、ゴンちゃんが？」

「ううん、ゴンちゃんだけじゃない！」

「あの、十四人！」

「それだけじゃないらしいの！陸上部も、サッカー部も、野球部も、みんならしい！」
その時、部室の入り口に、田代先生が突然現れた。

「みんな、俺の車に乗れ！行くぞ！」田代先生は、美紀達三人に向かって叫んだ。

「何処へ、行くんですか？」

「海岸だ！」

「け、決闘の場所ですね。相手は、誰ですか？」

「西伊豆中学の連中だ！」

「や、やっぱり！」美紀達は、思わず、合唱となった。

「止めないと、今度こそ、大変なことになる！」

「ゴンちゃんですか？」と、一早く口にしたのは、節子だ。

「いや、岡田健吾だ！」

(王子様が……) 美紀は、一番に助手席に乗り込んだ。乗ってみて、初めて田代先生の青い車に乗ったことに気が付いた。先生の青い車は、海岸へとひた走る。が、

車で行けるのは、海岸に築き上げられた堤防までである。堤防に乗り上げた所で、四人は車を降りた。

「あっ！」

両陣営共五十人はいるだろうか。睨み合いの最中である。次の瞬間にも決闘が始まろうとしていた。それでもみんな素手であり、誰も武器を持っていないのがせめてもの救いだ。

「バカ野郎！」と言いながら、走って行った田代先生は、睨みあいのみん中に割り込んだ。

「陣を組め！」田代先生は、双方の生徒達に命令した。

「今から、一人一人で決闘だ！一対一だ！相撲で勝負しろ！殴る蹴るはなしだ！」

「やろうぜ！」と最初に言ったのは、ゴンちゃんではなくて、健吾だった。

美紀達三人は、砂浜に腰を下ろした。黄金色に染まった空と、群青の海を舞台にして、一対一の決闘が果てしなく続いた。

(四)

美紀が東京の大学に進み、夏休みで帰省した時のことである。

狩野川の花火大会、すなわち、沼津の夏祭りで、ゴンちゃんを見かけた。

ゴンちゃんは、綿がしを巻いていた。頭には、ねじりはじ巻きをしている。

大手町のメインストリートには、人が溢れ、打ち上げ花火の音が豪快に響き渡っていた。

「ゴンちゃん、何やってんの？」ゴンちゃんは、怪訝な顔をした。

「見れば、わかるだろ？」ゴンちゃんは、巻いていた綿がしを、黙って美紀にくれた。

「ありがとう……」

美紀の弟の雄太が言っていたことが、思い出された。

「みんなが恐ろしがってるゴンちゃんが、俺にはすごく優しいんだ。お前、美紀の弟だろって言って、なんか、いろんなものをくれるんだ」

ひたすらサッカーのボールを追いかけていた杉本は、後に中学校の先生になり、なんと日本代表の選手を育てた。ある時、美紀がニュースを見ていたら、杉本が育てたサッカー選手の特集が始まった。彼は、アナウンサーに一通の手紙を渡した。

「恩師の杉本先生から頂いた手紙です。サッカーなんか辞めてしまおうかと思った

時、この手紙を貰って、もう一度やってみようと思ったんです。この手紙を貰わなかったら、今の僕はありません。」

アナウンサーは、彼に代わって、恩師である杉本先生からの手紙を読み始めた。

画面には、杉本先生が書いたという手紙が、アップで映し出された。

その手紙を見て、美紀は、画面にくぎ付けになった。

（あっ、あの字！あのラブレターの字と同じ字！どうして気が付かなかったんだらう……）

美紀も、そして、杉本も、中学を卒業して三十年の月日が流れていた。

「いやあ、よかったよ！」

小暮君、いや、小暮先生は、ちょっと張り出たおなかを揺するようにして、豪快に笑った。よかったという言葉に、とりあえず、ホッとする。

「同窓会の懇親会がこれからあるから、案内するよ。あ、そうそう、先生が美紀さんの講演を聴いてくれたんだ」

「先生？」

「うちの学校の担当の、お医者さんだよ」

美紀は、入口にたたずむ男性のシルエットを眺めた。

「岡田先生」小暮先生が美紀を促す。

（王子様……）王子様は、一歩、一歩と、美紀に近づいて来た。



九条 美子

一九五五年一月二十六日 静岡県沼津市 生まれ

学歴 静岡県立沼津高等学校から早稲田大学政治経済学部政治学科卒業

在住 東京都

現在 東京平田日本語学院 教務主任

受賞歴 「ぼくのはつ恋」で毎日児童小説小学生部門優秀賞受賞

「青い麦わら帽子」で毎日児童小説中学生部門優秀賞受賞

第九回「文芸思潮」エッセイ賞 入選

著書 二〇〇三年七月、新風舎より「黒ねこは知っている」

二〇一二年十二月、日本文学館より「ヴィーナス」を出版